

3 新認定品種：優れた食味の「ゆめおとめ」

ねらいと成果

良食味品種への転換など『売れる米づくり』の推進の結果、兵庫県における水稻飯用品種の作付比率は「コシヒカリ」、「キヌヒカリ」（極早生熟期）と「ヒノヒカリ」（中晩生熟期）の合計で約90%を占めている。しかし、農家、農協等生産現場からは作期分散を図る観点から、両者の間にある早生～中生熟期の品種開発が強く望まれていた。

そこで、該当熟期の「日本晴」、「中生新千本」等に代わる食味が良く、栽培適性の高い品種として「ゆめおとめ」を育成した。

内容

1993年、「キヌヒカリ」を母、食味が良く、多収で良質、栽培適性の高い「葵の風」を父として人工交配を行い、以後系統育種法により選抜固定を図った。

なお、育成に当たっては、稈長と玄米タンパク質含量は負の相関関係にあるところから、長稈化即ち玄米タンパク質含量を低減することにより食味の向上を図り、長稈化に伴う倒伏の危険性は稈質の向上により回避しようとした。

表1 「ゆめおとめ」の生育・収量・品質

品 種 名	出 穂 期 (月日)	成 熟 期 (月日)	稈 長 (cm)	穂 長 (cm)	穂 数 (本/m ²)	障 害 の 多 少			精 玄 米 重 (kg/10a)	同 左 比 率 (%)	玄 米 千 粒 重 (g)	玄 米 品 質	
						倒 伏	葉 い ち	穂 い ち					
ゆめおとめ	8.27	10.11	100	19.4	362	1.6	0	0	0.9	534	95	21.0	3.3
比) 日本晴	8.21	10.4	83	19.4	418	1.4	0	0	1.1	560	100	22.9	5.4

注-1) 試験年次：1999年～2002年

注-2) 播種期：5月23日、移植期：6月14日、施肥量 (Nkg/10a) 基肥 (代かき前) 4-分げつ肥 2-幼形期 2-減分期 2

注-3) 障害の多少は0(無)～5(甚)を、玄米品質は1(上上)～9(下下)を示す。

表2 「ゆめおとめ」の食味官能調査成績

試験年次	品 種 名	総合評価	食味ランク
1999	ゆめおとめ	0.350	A
	参)ヒノヒカリ	0.300	A
2000	ゆめおとめ	0.300	A
	参)ヒノヒカリ	0.550	A
2001	ゆめおとめ	0.300	A
	参)ヒノヒカリ	0.350	A

注-1) 日本穀物検定協会神戸支部の調査による。

注-2) 食味評価は、滋賀県産日本晴を基準に実施した。食味ランクは、A (基準米より明らかにうまい) ～ C (基準米よりかなりまずい) の5段階評価を示す。

「ゆめおとめ」は、出穂・成熟期がともに「日本晴」より数日遅く、稈長は100cm程度と長稈で、穂長は「日本晴」と同程度、穂数は「日本晴」より少なく、草型は偏穂重型である。粒着密度は中、脱粒はしにくい。

倒伏抵抗性は「日本晴」と同程度、穂発芽性は難で、「日本晴」よりしにくい。いもち病抵抗性遺伝子はPi-tと推定されるが、強くない。

収量性は「日本晴」よりやや少収であるが、腹白、心白の発生は少なく、光沢も「日本晴」を上回り、品質は良好である。玄米は中形の中～小粒で、千粒重は「日本晴」より小さい。食味関連成分のうちタンパク質含量が少なく、食味は「ヒノヒカリ」並みで、良好である。

今後の方針

県中南部平坦地の地力が中庸な地域に適する。苗がやや伸長しやすいので、徒長しないよう健苗の育成に努める。倒伏にはやや強いが、いもち病には必ずしも強くないので、多肥栽培は避ける。

平成17年度は加西、姫路、三田、北淡路農業改良普及センター管内等での試作が予定されている。

田中萬紀穂 (旧農業技セ・作物部)

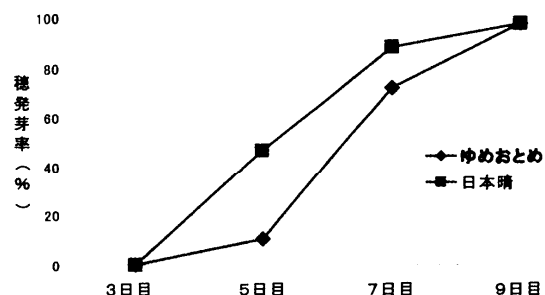


図 穂発芽率の品種間差 (2001年産)